

春が来た



佐川毅彦

グラフィックデザイナーの長男が久しぶりにやってきた。沖縄のお盆に合わせて十日ぐらい休みをとってきた。

今、那覇のおもろ町の琉球銀行で私と長男の絵画展をやっているのによかった。仕事関係にも挨拶したいという。

それはいいとして、今、一緒に住んでいる彼女（リサ）がいて、なんと、結婚して、沖縄に住むという。家を買うことも考えているという。言うことがかなり具体的で今回は間違いないさそうで、このまま、うまい具合に話がとんとん拍子に進むことを願いつつ、妻に電話をした。

「我が家にもやつと春がきた」と、とても喜んでいる。私に調子に乗って、バカ騒ぎをしてぶち壊さな

いようにと電話を切られた。

長男が東京に帰って、しばらくしたら私も上京する。九月から十月にかけて、東京都美術館で汎美展に参加するために作品五点まるめてもってゆく。

汎美展の最終日、夕方六時に家の近くのファミレスで長男たちと紹介をかねて、食事ということに決めていた。いつもは最終日は駅前で生ビールで乾杯だけど、今日は作品を持ってまっすぐ帰った。

「アンタ、早くシャワーを浴びなさい。汗臭いよ。キレイにしてネ!」と妻がうるさい。私は臭くはない。シャワーを浴びる必要はないけど、いちいち逆らっていると後が恐ろしい事になるので、素直にシャワーを浴びる。

ファミレスに私たちは自転車で行く。妻は手作りのチーズケーキを乗せて、私はなんだか忘れたが何か袋

に詰めて持って行つた。

なるべくゆつたりした席を、ドリンクバーの飲み物を取りにゆくと、き、いちいち隣を立たせなくてもよいような席で? この店にはない! なるべくドリンクバーには行かせないようにたくらんでいる。腹が立つが、ここはおさえて適当に席を決める。とりあえずドリンクバーとワインをたのんで妻はアルコールはイケンとにらんでいるけど、ヨカヨカと私はワインの炭酸割りで二人を待つ。

名はリサ。年は三十五と聞いただけ。それ以上追及すると壊れそうなアブナイ気がして。とにかく私の息子である。きつと私好みのいい女だと決めている。私は仕事で女性をよく描いている。五十年、女が主人公の小説のさし絵を描きつづけている。勝手にリサを描いてワクワクしながら、今か今かとワインを飲んでいる。

おかわりの炭酸と水をと、立つたら息子たちが見えた。リサと顔が合う。私を見るなり笑い出した。私も笑顔で応える。リサは私を見てすぐ私だとわかったようである。

リサは私の想い描いていた女性とは違っていたけど、私はとても気に入った。一目で好きになった。そして息子と似ていると感じた。

家族のことや、いろいろナンヤカヤこれからのことを話してミヤゲを渡して、リサからは茨城のお菓子をもらった。妻は私以上にリサを気に入ったようである。帰ってから私たちはまっすぐおきのシャンパンをあけた。

その夜は二人で盛り上がりかなり飲んでしまった。

災害報道を見て

志^し村^{むら}栄^{よし}至^{のり}

(評論家)



テレビに見入る関東圏^{けん}の人間には、二〇一九年という年は大変な年だった。超広範囲で住宅の屋根が飛ばされ、住宅街は泥の海と化^かし、驚天動地とはこんな光景を見ることがと。

ところが災害報道の裏に廻^{まわ}ってしまつたが、社会では前代未聞^{みえん}とも言ふべきことが起きていたのだとか。報道によると、複数の教師による同僚いじめとあったが、まさかそんなことがと、今もって信じられない一件だが。学童、いや子供社会と言うべきか、そこに起こることは大人社会の反映とも考えられるわけで、今回の事例が事実だとすると、大変なことが予想され

なくもないわけで、言葉を失う。

人間性に変質が起こつているとは思われないが、自分を見直すことは大事なしいと信じて、小林秀雄の著作からここを引用する。

「空虚な精神が饒舌^{じょうぜつ}であり、(中略)自足^{じそく}する喜びを藏^{かく}しない思想は、相手の弱点や欠点に乗^{のり}じて生きようとする」。

これは、小林の後期の『政治と文学』に出て来るが、鋭い観察眼が捉え^{とら}えられていて、いつものことながら感心してしまう。

ただいま、学校教育その他で、自己

表現、自己主張が注目され、尊^{たつ}ばれる傾向にあると思われるが、小林のこんな言葉は関心を集めることはないらしい。

それはともかく、今回は、小林が街を散策中、拡声器の宣伝に誘われて変わった「展覧会」を見物し、感じたままを執筆した『死体写真或は死体について』というやや異色の作品から紹介する。ここには、世^せ上^{じやう}一般ではほとんど話題になることのない、それゆえに大多数の人が無縁のまま生涯を終えると思うと、実に貴重なことが書かれているからだ。

「地獄草紙^{じごくそうし}(鎌倉時代の絵巻物)の作者も、(中略)死に至る苦しみだけを描いた。作者はよく承知してゐたのである。人間は地獄に行つても生きてゐる事を。死ねば、鬼^{おに}がすぐ蘇生^{そせい}させてくれる事を」。

誰もが確かめようのない内容ゆえ、著者への信頼の度合いに左右されるが、小林とともに鎌倉時代の先人にも敬意を払いつつ読むと、これが人間の

真景かと思えて来る。

しかし、本当の大事中の大事は、最後に出て来る。外国由来と思われるかなり長い引用をしているが、私達が刮目すべきはそのラストのここだ。

「其は汝の往かんとする陰府には、工作も計略も知識も智慧もなければなり」(『伝道之書』)。

言うまでもなく、マスコミは連日、様々な人間模様を事件その他を介して伝えてくれる。私達はずい、興味本位でそれに気持ち奪われる。しかし、誰にもいつの日か、生きている、あるいは生かされていると言うべきか、その日々の一刻一刻がどれほど大切かを肝に銘じる日はやって来る。

小林が、「陰府」には、「工作も計略も知識も智慧」もないことを伝えて、逆説的に、人間は生きる日々をどれほど大切と受け取って生きて、過ぎることはないと教示していることは明白か。しかし今、小林の存在が忘れ去られて行くようで、実に残念と思っている。学校では、『徒然草』とか『無常

といふ事』と出会った記憶はあるが、それ以上でも以下でもない、と距離を置いている人は多いらしい。

「過去から未来に向って飴の様に延びた時間といふ蒼ざめた思想(僕も小林にはそれは現代に於ける最大の妄想と思はれるが)から逃れる唯一の本来に有効なやり方の様に思へる」。

から、奇妙な文章を書く人だと判断して、「記憶するだけではないけないのだらう。思ひ出さなくてはいけないのだらう」。

を無視したら、若き日にベルクソンから受納した真の時間の觀念に近づけないことになる。ベルクソンの或る著作には、「生き続ける過去」という一項があるが、「一つの持統体としてこの世を理解したベルクソン」と書いた小林に尊敬の念で接すれば、ぐっと身近かに来てくれるものなのだ。

しかし、今回は、小林が「単行本化」と「全集への収録」を禁じたとされる『感想』から、私達が自らの人生観を考える際に、大基本となるかも知

れぬ以下を引用したいと思う。或る出版社が大局の見地からあえて、小林の禁に反して「抄録」とことわりつつ公開してくれたことに感謝しつつ。

「ベルクソンは、素直に与えられた統一から出て来るのであり、統一そのものについて思ひ患ひはしない。一種の統一が先づ与へられてゐるのは、絶対的な事であるが、それは、彼といふ一個の生活体の統一が在るがままに有限であり相対的である様に、有限で相対的なものだ。それで何一つ不足したものはない」。

私達は、いつの日かはともかく、人生のどこかで真剣に生きることを考えることがあるものだ。そんな時に、小林のこの片言はヒントをくれる。これは実体験した人が知る、いわば経験則かも知れないが。

「二種の統一が先づ与へられてゐるのは、絶対的な事」という、一見したところ何のことかと読んでしまいがちな文言を、真に迫って感得し驚くことはあるものだ。

酒と肴・魚―サワラという魚の面白さ―

山 本 義 久

(国立研究開発法人 水産研究・教育機構
水産大学校 水産流通経営学科 准教授)



(2) サワラの生物学的検証

サワラ類はマグロ類やサバ類、カッ
オ類などとともにサバ科に属し、サバ
科魚類四十九種の内の十八種を占め、
世界の熱帯、亜熱帯、温帯域に広く分

布し、漁獲量も多く、重要な水産資源
である。また、サバ科魚類は概ね魚食
性であり、大型化するため、海洋の生
態系の上位に位置する。熱帯地域のサ
ワラ類は二mを超すサイズまで成長

するため「King mackerel (サバの王
様)」と呼ばれ、その食味の良さも含
めて世界中で広く食されている。
我が国近海ではウシサワラ、ヨコシ
マサワラなど数種類が分布している

が、最も漁獲量が多いのが皆さんもご存知の「サワラ」である、英語名で「Japanese Spanish mackerel」と呼ばれる種類で、北太平洋海域の東アジア海域（中国、朝鮮半島、日本周辺）に分布している。

サワラは、産卵回帰する魚であり、成長し成熟すると自分が生まれた海域に戻り、産卵する習性がある。産卵はサイズ依存性があり、1kgサイズ以上になったら成熟するため、餌がたくさんあり成長が良い時期には、一歳で産卵し参加できるが、餌が少なく成長が悪い時期には、二〜三歳からの産卵に参加できる。サワラの成長は早く、孵化してから半年で全長六〇cm、体重1kg、一歳で二・五kg以上に成長する事例もある。また、産卵は水温が十五度以上に上昇し、長日化する春一回のみであり、産卵場所は特定な海域で行われる。

それではなぜサワラは産卵回帰するのか？ 産卵回帰する魚でよく知られているのがサケであり、孵化してから

一定期間生まれた川（母川）で過ごし、海に下ってオホーツク海など豊富な餌がある海域で大きな回遊をして産卵のために母川に戻る。これを産卵回遊という。瀬戸内海でとれるサワラは瀬戸内海の中央部の燧灘、備讃瀬戸、播磨灘の海域で四月下旬から六月下旬まで産卵する。その海域では他の魚も産卵回遊してくることが知られている。例えばトラフグ、ヒラ、マナガツオなどである。それぞれの種類で産卵時期が異なり、早い順にトラフグ、サワラ、ヒラ、マナガツオの順で同じ海域を共有して産卵場として利用している。他の魚も同様な利用をしている可能性もあり、なぜこの海域なのかは、十分な調査はないが、プランクトンや小魚などの餌が豊富であるためと推察される。即ち産卵回帰は生まれ育つ生き残りの確率がより高い海域であるためと考えられている。産卵場周辺では先ず雄が陣取り、成熟した雌が来るのを待ち受けている待ち伏せ作戦をサワラは取る。これは我々の市場調査での

推定であり、現実の待ち伏せ作戦は確認していない。余談ではあるが入院していた時にインタビューした入院友達の木場博さん曰く、（この人元漁師で網元を昭和初期にしていって、その蘊蓄が面白かった）。産卵期に海底から盛り上がり上がつた砂山にサワラが蟠集しており、そこを網をまいてサワラを獲る。

群がっているサワラはその砂山に頭を突つ込むように砂山周辺をひらひらと舞泳いでいる？ これは産卵回帰し待ち伏せている？ 様を観察したのではないか？ ともし妄想し、私には衝撃的だった。まさしく余談。

（3）サワラの食文化的検証と

食文化継承の取り組み

サワラの食文化については讃岐では押しずしなどのサワラ料理で親戚縁者をお接待する「はるいお」、「麦うらし」という習慣がある。香川県東部の地域の押しずしは「カンカン寿司」と呼ばれ、専用の箱を使い、木槌でカンカンと叩いて押し固めるため名づけら

れた伝統食です。時に柚子を利かせたそれは、美味しく元気が出て、酒にも合う最高のお接待である。また、愛媛県新居浜では「はるいお」と同じように「豆年貢」という風習があり嫁が元気で「まめ」に働いた感謝として、サワラを嫁の実家に贈り、押しずしなどのサワラ料理でもてなす風習がある。

瀬戸内海の春に獲れるサワラはこのように、地域の人々のために瀬戸内海がくれたサワラというご褒美の様な形で、喜ばれ親しまれている魚である。

香川県の元水産試験場長川西氏が調査した讃岐のサワラの消費量の統計が無い時代での推定でも一世帯一本のサワラを春に購入していたことが推察されている。讃岐では昔から重宝された魚である。

しかし、そのサワラが一九九八年には大不漁で、瀬戸内海で数千トンとれていたものが僅か一九八トンにも漁獲量が減少し、サワラ食文化を継承するために、我々は香川県を筆頭とした瀬戸内海沿岸府県と共同体制を取り、サ

ワラの稚魚を育て、放流する栽培漁業を実施し、これまでに二〇〇万尾の稚魚を放流してきた。その成果により、現在は年間数千トンに回復してきた。

毎年その放流式で「サワラ食育教室」を開催され私と香川町の割烹なか溪の中條氏が二人三脚で講師を務め、伝統食のみならず今風の料理で全部食べ尽す「サワラ丸ごとたべまいよ」を毎年一回、現在まで十三回開催している。毎回二品の創作料理を披露しているの

で、そこで少し私が好きなサワラ料理の紹介。

(4) サワラの旨さと

酒に合う料理の検証

サワラの旨さは先ず、生で刺身が最高だが、私おすすめめの「サワラの塩たたき」をぜひご賞味あれ。作り方は簡単。刺身用のサクに取ったサワラの皮付きの切り身を使い、皮目のみに塩を刷り込み、フライパンでオリーブオイルを少々して強火で皮目のみを焼き切り、タタキとして盛り合わせ、皮目は

熱いままに身は冷たい状態でショウガニンニクはもちろん好みで柑橘系少し垂らして、時期の新タマネギや香味の野菜と一緒に、ほおばれば幸せが舞い込んでくる。もちろんそこには冷えた日本酒、純米大吟醸があれば、至福の時が訪れる。口の中で熱い冷たい、もっちりとした身の歯ごたえ、脇役のシャキシャキとした野菜と柑橘系のキリッとしたインパクトが、芳醇な冷えた日本酒の船に乗って心地よい波に揺られて、よい至福の大海原に漕ぎ出されたら、たまらない。ここに、あぶつた中骨で出汁を取った汐汁に放った少しの素麺汁があれば言うことなし。この料理簡単で失敗は無い。居酒屋山ちゃん的には是非ともトライしてほしいものである。

また酒のつまみとして良いのが、「サワラのからすみ」があるが食文化的検証も含めて書き出せば切が無いので今回はこの辺で。



国指定重要無形文化財「阿波人形浄瑠璃」

徳島県立

「どくしまけんりつあわじゅつろうべえやしき」

阿波十郎兵衛屋敷

三味線の演奏と太夫の語りに合わせて、人形遣いによって操られた人形が役を演じる。江戸時代に花開いた人形浄瑠璃の成り立ちには、徳島藩が大きく関わっていました。その歴史と、奥深い人形浄瑠璃の魅力を紹介する施設が「徳島県立阿波十郎兵衛屋敷」です。ここでは貴重な資料の展示と共に、人形浄瑠璃の定期上演が行われています。



人形の仕掛けなども解説されている。



人形浄瑠璃のルーツは淡路島だといわれています。江戸時代、淡路島を管轄していた徳島藩が保護したことで、その文化は一気に花を咲かせます。当時の徳島藩は、藍染めの独占販売によって大いに潤っていました。藍商人はこぞって人形浄瑠璃の一座を呼び寄せたので、徳島でも一大ブームとなります。そして農民たちが自らの手で上演を行うようになるほど、人形浄瑠璃の文化は、この地に深く根付いたのです。現在も徳島には人形浄瑠璃を継承する団体が20以上あり、80棟を超える農村舞台が残っています。

心情を見事に表す人形の演技に
観客の心はゆさぶられる。



人形浄瑠璃では、3人一組で一体の人形を動かします。登場人物の特徴を捉え、少し誇張して作られた人形に、3人の人形遣いの気持ちが届められることで、人間よりも人間らしい表現が可能となるのです。緩急、強弱、高低、間合いの四つを駆使して、心情や情景を語る太夫、多彩な音色の三味線と一体になって、観客の心をお芝居の世界へ引き込みます。

阿波十郎兵衛屋敷では、毎日2回の上演が行われている。



徳島のことをもっと知って欲しい。

今、人形浄瑠璃は世界から注目されています。阿波十郎兵衛屋敷にも海外からの来客が増えており、先日は地元の人形浄瑠璃団体がパリ公演を行いました。館長の佐藤さんは「阿波十郎兵衛屋敷を入り口として、徳島全体の魅力を発信していきたい」と考えています。すでに吉野川を船で渡って同施設に訪れる「徳島じょうりゅうりクルーズ」という取り組みも行っています。佐藤さんは「浄瑠璃には、美しい宝石という意味がある。徳島が誇る宝物をたくさん知ってほしい」と願っているのです。



佐藤憲治さん
阿波十郎兵衛屋敷の館長。阿波人形浄瑠璃振興会の事務局長でもあり、常に徳島全体の観光のことを考えている。



施設にある「徳島じょうりゅうショップ」では、徳島の宝石と呼べるような地元ゆかりの商品を多数販売している。



牛蒡の花

中西美子



見たことのない花を店先で見つけました。「何という花ですか？」と尋ねると、店員は、伝票を確かめながら「牛蒡の花ですね。私も初めて見ました」と云うのです。アザミによく似た紫の花でつぼみがたくさんついています。花を支える総苞には細かい刺が多数あり刺の先には釣り針のようにかえしがあります。しつこいひつつき虫でマジックテープの発案のモデルになったほどです。いろいろな人に「牛蒡の花見たことがありますか？」と聞きましたが誰もわかりませんでした。調べてみるとキク科ゴボウ属の二年草とありました。春蒔きの品種は、四月に種蒔きをして、秋に収穫します。六月以降に咲く花を見ることがないわけでした。

花言葉がまたひどくて「いじめないで」「私に触らないで」「しつこくせがむ」なんていうのがありました。牛蒡の語源は、根が牛の尾に似ているからだそうで、食用にしているのは、日本と韓国、台湾ぐらいで他の国では、薬用に使われています。子供のころは、よくこんなものを食べようと思ったもんだと思いました。太平洋戦争のとき英米の捕虜に牛蒡を食べるように強要したということで虐待したとして、日本兵が戦犯として裁かれたそうです。今では、ポリフェノール、食物繊維、ミネラル豊富な健康野菜の代表です。日本の食卓になくはない牛蒡。これからは、かわいい花のことも、思い出しながらいしく頂こうと思います。

たんたん狸

高橋和島

(作家・郷土史家)



月に一、二度、昼飯を一緒にする友人Aさんがいます。彼の車に乗せてもらって出かける先は決まって隣町の老舗のうどん屋。午前十一時ぴったりに開く店にいそいそと入り、夏場なら冷たい「ころうどん」や「いもうどん」、冬場なら湯気の立つ「あんかけ」か「味噌煮込み」を楽しみます。

この店、二人が顔馴染みでも、開店時間より早く入れてくれるようなことはないのです。途中で、どこかで時間調節をするわけですが、大方は「道の駅」に立ち寄ります。その際、Aさんは必ず沢庵漬けと皮付き落花生を買い

ます。彼の晩酌の友は漬け物と聞いていたので酒のつまみだなと見当をつけたところ、驚いたことには彼の家の庭にやってくる狸への土産だったのです。

耳鼻咽喉科の開業医である彼の住まいは永保寺という禅寺の裏山にあるせいか、庭に狸が遊びに来るとか。ここまでは田舎ではよくある話ですし、狸がピーナツを好むのは頷けます。しかし、沢庵が好物とは意外でした。そのうち、狸君がどんなふう到大根漬けを食べるのか詳しく教えてもらおうつもりです。

隣町に文科省管轄の核融合研究所が

あります。ここに勤め定年を迎えた人が土地を買い、家を建て、住み着くケースが珍しくありません。Bさんの場合もこれで、東京生まれ東京育ちの身で、小高い丘陵にある中学校隣接地に広い庭のある家を手に入れ、夫人と二人老後を楽しんでおられました。奥さんも気さくな魅力的な人だったのでよく遊びに行かせてもらいましたが、この家の庭へやってくる狸の親子がいたので。

皮膚病を患っていたのか栄養失調だったのかいずれにしても、親子は共に毛が抜けた哀れな姿をしていました。

餌として二匹にBさん夫婦は菓子パンを与えていたので、当方も遊びにゆくときは手土産の中に狸君へ菓子パンを忘れないように加えました。

酒を酌み交わすのが目的ですから、訪問時間はいつも夕刻になります。Bさんによると、狸公親子にとつて朝夕が獲物確保のための遠征時間。当方のそれと重なるわけです。Bさんと一献やり始めると、彼らは姿を見せてくれず。

手入れの行き届いた芝生の庭にBさんが菓子パンを放り投げ、わたしも続きます。あんパン、クリームパン、メロンパン……。いずれも喜んで食べてくれます。ただし、勝手にそう思っているだけで、パンを確保した狸公はいったん素早くツツジなどの茂みに潜り込んでしまい、実際に食べるところは見せてはくれません。

真夏のある日の夕刻でした。冷えたビールで顔を赤くしたBさん夫婦と当方はか数人の客は、縁側に出て、狸公の出現を待ちます。

いくらもしないうちに、狸公親子は茂みの中から出て来ました。

大声を出すと怯えると、言われているので、われわれは小声で呼び掛けながら交互にパンを芝庭に投げ入れます。で、わたしの番が来ました。片手に缶ビールを持ったままあんパンを放り投げたときです。不意に頭上に羽音。あつと思う間もなく、大柄な鳥が滑空してきてパンを浚っていききました。鶯でした。

Bさんによると、近くの電線で待ち構える鳶殿が狸公の餌を横取りに来るのは毎度のこととか。両者の間に協定はないので、パンは早い者勝ち。動きの鈍い狸公親子はやられっ放しということでした。

無類の酒好きだったBさんは少し前、脳溢血で亡くなり、一人きりになった奥さんは家売り払って施設に入られました。このため、あの狸公親子が今どうなっているかは知りません。多分、なんとか生き延びているのではないでしょうが。

わたしは毎朝、近くの里山を一時間半ほど歩きます。四千歩ほどの先の尾根道に建っている休憩用檜の丸太小屋（飛騨白川の間伐材利用。一間四方）まで行き、十人余の山歩き仲間が共用するカレンダーの通信欄兼出欠欄にサインをして戻ってくるという日課です。

昨夏のことです。いつもの時間に小屋へ向かうと、四人の常連が少し興奮気味の顔でわいわいやっていました。何事かと尋ねると、今しがた小屋の脇を小ぶりの狸がのこのこと歩いて行つたということです。目撃の機会を逸したわたしは大いに残念がりました。見たのが一人なら疑うところですが、四人、それも信用の置ける人たちばかり。この里山にも狸はいたのです。

田舎町とは言え、名古屋へ電車で三十分の通勤圏内、人口十一万の地方都市。それなりに都市化が進んでいます。食べ物の確保は間違ひなく難しいはずなのに狸公、よくぞ住み着き、頑張ってくれているものだと思ひます。

義男の青春と別離

片岡 義男
(作家)



十一月十五日、快晴の平日、午後三時から四時のあいだ、僕は京都の三月書房にいた。友人たちふたりがいっしょだった。三月書房は御池から寺町通りに入ってすぐ左側にある。この書店が健在ならそれでいいか、という気持ちになった。数冊の本を僕は買った。友人たちもそれぞれに何冊か買ったと思う。僕が買った数冊の本のなかに、つげ義春さんの『義男の青春別離』という文庫があった。ちくま文

庫だと思っていたが、新潮文庫だった。買おうと思って東京の書店で探しても見つからなかったのは、そのせいか。かつて友人が進呈してくれて、そのときに読んだのだが、なぜだか手もとにない。なければ買うほかない。京都の三月書房で手に入れることが出来た。

なぜこの本を探していたのか。義男だからだ、とまず書いておこう。小説あるいは漫画など、物語が文字で作品

になっているものの題名のなかに、義男、という名前が登場しているのは、これだけだと僕は思う。だから僕は、『義男の青春』という題名で、小説を書こうと考えている。義男、という名前が題名に登場する、二冊目の本になるはずだ。ぜひこの本を作りたい。作るためには書かなくてはいけない。よし、それでは書こう、という気持ちになっている。

三月書房で手に入れたこの本の題名は、『義男の青春・別離』というのが、正式な題名であるようだ。この題名をしばらく眺めていた僕は、いいことを思いついた。これから書く義男の青春の物語を、『義男の青春と別離』という題名にするといい、と閃いたからだ。『義男の青春と別離』は、なかなかいいではないか。青春とは次々に別れることである、というような物語の構図が、この題名のなかにすでにある。

ヨシオ、と片仮名で書いた名前の青年が登場する短編小説は、すでにいく

つか書いた。長編のなかにもヨシオが出てきていた、という記憶もある。このヨシオは義男であり、その義男はこの僕なのだ。『義男の青春と別離』のなかでは、ヨシオという片仮名ではなく、僕の本名である義男で彼は登場する。そしてその義男はこの僕なのだと、もう一度、書いておこう。

僕、という一人称でこの僕が登場する小説も、いくつか僕は書いた。一人称による僕は、現実のこの僕なのだと思うといい。書いているときの書き手である僕は、小説のなかで僕と書くそのたびに、現実の自分をその僕のなかに感じてきたからだ。

『義男の青春と別離』では、この僕は、義男、という三人称で登場する。自分自身を三人称で書いて小説のなかに登場させるのは、これが最初のことではないか。片仮名で書いたヨシオは三人称だがヨシオと義男とでは、まるで異なる。一人称の僕の場合も、僕の内容は、異なる。一人称の僕。片仮名のヨシオ。そして漢字で義男と書くと

きの、三人称の義男。僕ひとりだけで三とおりの人を書き分けることが可能なのだ、といまようやく、僕は気づいている。

僕の母親が大学生だった頃、歌舞伎を少しだけ勉強しようだ。そのとき『仮名手本忠臣蔵』に登場する、天川屋義平という人物に惹かれた。自分に男の子供が出来るようなことがあれば、その男の子の名前は義平にしよう、とまで決心したほどだと言う。彼女が結婚した相手、つまり僕の父親は、ハワイの二世であり、日本語はよくわからないけれど、ヨシオ、という音声は気に入っていた。だから母親はなんの迷いもなく、ヨシオのヨシには義を持つてきて、男の子なのだからオは男にしようにとときめて、義男が出来上がった。そしてその義男は、『義男の青春と別離』という長編小説のなかで、青春をあますところなく披露し、別離を体験する。

とある私立大学を卒業した僕は、ほとんどなにも考えないままに、なか

ば人まかせて商事会社に就職し、そこを三か月で辞めた。それ以来のフリーランス生活だ。会社を辞めたのは二十二、あるいは二十三だった。二十代の前半の、さらに前半だ。『義男の青春と別離』は、義男が会社を辞めたところから、始まるというのではない、か、といま書き手の僕は思っている。

その彼が多忙なフリーランス生活のかたわら、何人かの女性と次々に別れていく様子が、物語の進展を支えるひとつの柱になるといい、とも僕は考えている。別れる女性は四人くらいか。四人と別れるまでに三年近くかかったとして、別れきって義男は二十五歳になっっているなら、そのときが義男の青春の終わりだろう、とも思う。四人の女性たちそれぞれと、楽しく過ごしたり、叱られたり、からまれたりしている日々が青春であり、女性たちと別れたなら、そのとき青春は終わっている。という物語を、『義男の青春と別離』で、僕は書くこうとしている。